

II・おとなの発達障害と臨床

ひきこもりと広汎性発達障害

—関係障害に対する関係発達支援の実際—

小林隆児

大正大学人間学部臨床心理学科
くじらホスピタル

はじめに

わが国でひきこもりの問題が注目されるようになってかなりの歳月が経過した。ひきこもりは単に状態像を示す用語で、背景にはさまざまな精神疾患が関係し、今ではその中に

広汎性発達障害も含まれていることが明らかにされている。斎藤が指摘しているように、ひきこもり状態においては、対人関係の悪循環、とりわけ家族との間に悪循環が生まれ、それが固定化し、治療は難渋しやすい。

しかし、ひきこもりの状態を論じているさまざまな論考を閲覧しても（たとえば「この科学」一二三号の特別企画「ひきこもり」⁽³⁾）、そこにどのような対人関係の質的問題が生じているのか、その実態が今一つ具体

的に浮かび上がってこない。その多くが、ひきこもりは対人関係の問題であると異口同音に指摘しているが、具体的な理解と対処法になると、もっぱら個に焦点が集まり、関係の質そのものは見えてこないのである。

本稿では、広汎性発達障害を有し、ひきこもりを呈したある成人女性を取り上げ、その家族とのあいだで認められた関係（関係障害）がどのような質的問題を有していたか、さらには彼らへの関係（発達）支援についても具体的に考えてみる。そして、ひきこもり問題を関係の視点から捉えることによって何が見えてくるかについても論じてみたい。

本稿は筆者の母親面接を中心とした報告であるが、実際には対象事例に対して心理相談

員が個別に対応し、母親面接と併行して各々三〇分間の面接を原則毎週行ったものである。

事例提示

A子、初診時二六歳、無職。

診断名

広汎性発達障害、知的水準・中等度遅滞

(推定)

家族構成

両親と父方祖母、A子の四大家族。同胞には二歳下に妹がいるが、今は大学生で単身生活を送っている。A子は数年前まで知的障害者通所施設（就労移行支援事業）に通っていたが、現在は自宅にひきこもった状態で在宅生活を送っている。

発達歴

乳児期は発達も早く、二歳頃には二語文を話すほどで経過は順調だった。しかし、三歳時、点頭てんかんの発作が出現。以来、ことが次第に減少し、精神発達全般にわたって停滞がみられるようになった。五歳の時には発作のコントロールが困難となり、四ヵ月ほどてんかんセンターに入院した。さらには、九歳で発作が増えたため、薬物療法を調整したこともある。

それでも学童期、思春期はそれなりに学校にも適応し、普通教育を受けていた。中学三年時、両親はA子の将来を考えて特殊教育に変更した。その後、養護学校高等部を卒業し、無事就職することができた。仕事内容はスーパーマーケットの野菜パック詰め作業であった。一年あまり働いたが、仕事のペースについていけず、解雇となった。その後まもなく、知的障害者通所施設に通うことになり、作業に従事するようになった。

現病歴

もともと確認などの強迫行動は目立っていたが、しばらくは施設に毎日通っていた。しかし、およそ二年前、突然通所できなくなり、昼夜逆転、無気力となり、一日中布団の中で眠るような状態になった。食事、入浴、着替えなどの基本的な生活習慣も難しくなった。近隣のふたつの精神科診療所や、てんかんて通院している病院で相談したが、「精神病の手前だ」「知的障害がベースにあるので療育を」「このような症例を経験したことがないのでわからない」「本人が助かないものを無理矢理どうこうはできない」などと言われ、治療を引き受けられるところはなかった。

昨年、近隣の精神科診療所の紹介で精神科病院に一ヵ月ほど入院したところ、病棟では

入浴も可能になり、生活リズムももとに戻ったが、退院後、自宅での生活になると、以前と同じ状態に戻ってしまった。この入院をきっかけに、本人は自宅に居るのが嫌なのか、施設に入ると言いだしたので、知的障害入所施設を見学したが、施設側から断られた。いよいよA子と家族は追い込まれ、孤立した状況に陥っていった。

そのような状況で、通所施設の職員から筆者に相談があり、治療を引き受けることになった。

初診時の状態

長身だがやせている。怯えているのか、表情は固く、困惑気味で生気に乏しい。面接中、筆者のほうに視線を向けてじっと瞬きもせずに見つめている。緊張も強いが、相手をしっかりと見ることによって様子をうかがい、自分なりになんとか応じようと努めているように見える。

やりたいことはないかと尋ねると、**「仕事をしたくない」という。**この時ばかりはことばも明瞭で、強く自分の意見を述べている。発語は比較的明瞭で聞き取りやすい。ただ、断片的な話し方で、尋ねられた時に初めて反応する程度である。質問には嫌がることなく素直に反応している。しかし、入浴などがどうして嫌なのかを尋ねても、判然とした反応は返っ

てこない。何かをしたいという欲求をとくに主張することはなく、困惑している印象が強い。

一日の生活の流れを聞くと、○時×分起床などと時間をはっきりと述べる。時間がA子の生活においてひとつの枠組みとしての意味をもっているであろう。それとも関係するのか、診察室でも壁にかけてある時計をじっと見つめていたが、自宅でも応接室で時計をじっと見つめていたことが多いう。時間の経過を針の動きで確認しているかのようには見えなくなるほどだという。

臨床診断

対人関係の特徴と行動特徴から、広汎性発達障害と思われるが、主たる問題はひきこもりと病的退行状態だと判断し、母子間の関係に焦点を当てながら介入していくことにした。

治療経過

第二回(初診の一週間後)

初診時A子の全身の動きがあまりにもぎこちなく、薬物の副作用も疑われたので、前医に処方されていた抗てんかん薬(zonisamide 100mg)のみ継続し、抗うつ薬(fluvoxamine 25mg)と抗精神病薬(aripiprazole 12mg)は

すべて除去した。その結果、多少なりとも動きや発語はやや改善し、コミュニケーションがとりやすくなった。

母親の話で、日常生活の中ではいろいろなこだわり行動が認められることがわかってきた。母親の一挙手一投足にずっと注目し、母親がお茶を注いでいるときに一滴でもテーブルの上にこぼすと、遠くで見ているとすぐにかけて布巾でこぼれたお茶をふき取る。食事で一口食べると口の周りに物や汁がつくのを嫌って、食べるたびにティッシュペーパーで拭いている。

父親はこだわり行動をひどく嫌って止めさせようとしますが、母親はさほど神経質にはなっていない。そのため、こだわりがエスカレートして深刻な状況になるまでには至っていない。

昨年、家族で北海道に旅行した日や大みそかの新聞を後生大事に持っている。つい最近まで入浴も着替えもしなかったが、父親の実家に帰った時には入浴も着替えもしたという。しかし、家に帰ってきたら途端にこれまで通りしなくなった。以前入院した時の一時的改善と合わせて考えると、どうも両親とA子のみで自宅にすることが、ひきこもり状態と強く関係していることが推測された。

この日の面接の途中で突然受付の女性がド

Aをノックしてカルテを持ってきた時、ひどく驚いた表情を浮かべ、じっと目を凝らしてその女性を見つめていた。ノックの音へのあまりの敏感な反応から、A子の心細さなしい不安感ばかり強めて強いことが想像された。

第三十六回

以後数回の母親面接で気になったのは、母親が面接中いつもノートを取り出して筆者の話聞きながらさかんにメモを取っていることだった。筆者の話は細大漏らさず記録していたのかもしれないが、筆者はどことなく自分が母親に回避されているように感じ、こちらの気持ちを通じらるるかど気になっていた。

そこで、筆者はこのことを取り上げてみた。すると、母親は即座に忘れやすいからです、とあつけらかんと答えた。筆者はそんなに懸命にメモをするほどの内容でもないから気軽な気持ちで聞いてくださいと助言した。母親自身は他者と直に気持ちに触れ合うようなかかわり合いをどこかで回避しているところがあるのではないかと想像された。母親の筆者に対する構えにはどこかこぢない固さが強く感じられたからである。

その他、気になったのは母親の話す早いテンポだった。日常生活でもてきぱきと動き回

る人だろうと思われた。A子の今の動きのテンポからすれば、母親はいつもいらいらしながら付き合い、どうしてもA子をせき立てるようになりがちだろうと容易に想像できたので、そのことを取り上げてみた。すると、A子も元氣だった頃は自分から好き嫌いをはつきり言っていた。最近ではA子が何事でもぐずぐずしてなかなか行動に移せないで、つい母親が代わりにやってしまうのだが、あとで自分からやり直すことが多いことが語られた。ここに母親の干渉に対するA子の拒否的な感情が表れていることが考えられた。

A子のぎこちなくゆっくりとした動きは、アンビバレンスゆえの葛藤が深く関係していることが考えられたが、それを助長させているのが母親の先取りの関与ではないかとも思われた。そこで筆者はこのことをわかりやすく説明しながらも、この時点では母親に具体的に指示することは控えておいた。今それを要求するのは無理があると判断したからである。それだけでもA子は食事を一、二回とるようになった。ただ入浴はまだ困難であった。

第七回

先日、母子ふたりで近所のスパに出かけて久しぶりに入浴ができたことが母親から報告

された。自宅の風呂には入らないが、外出して母子ふたりで入浴することが可能になったという。

一人暮らしをしている妹が大学院合格の報告のために帰宅した。その日はお祝いをした。するとA子が自殺したい、死にたいと言いつ出した。包丁を手にとって自分の胸に当てて斬えるが、いかにもぎこちない仕草でそこには演技的な印象が否めなかったという。母親はこの時のA子の行動の背後に、自分にもっと注目してほしいという気持ちが感じられたという。

さらに、母親がA子のことを「A子ちゃん」と呼ぶと、A子は即座に「A子だよ」と言い直させるということも報告された。ただ、このことめくって母親と話し合っていると、母親はA子の主張を、大人扱いをしてほしいのだと受け取っていることがわかった。筆者は母親に対するA子の思いには強いアンビバレンスが働いていることを考えていたので、母親に次のように説明した。

たしかにA子の主張を文字通り解釈すれば、大人扱いしてほしいということであるが、それはA子自身のみならず大人のように振る舞いたいとの気持ちから発せられたものではなく、そうしなくてはならないという思いが強く働いていたからではないか。母親も

感じとっているように、A子には母親に対して甘えたいという強い思いがあるが、いざ甘えようとすると、それを引きとめる思いが働き、身動きが取れなくなる。このようなアンビバレンスゆえの結果がA子のひきこもりとなって表れているのではないか。

さらに筆者は母親に大人扱いしてほしいと感じられるようなことが他にあるかと尋ねると、思いつかない様子であった。甘えてはいけないという思いは、常日頃からの母親のA子に対する自立を促す働きかけによって、いつの間にかA子のこころの中に強く刻まれていたのではないか。そのような思いがA子の主張に垣間見られるのである。

以前からA子は母子ふたりきりの時に強いこだわり行動が目立つことは語られていたが、このこだわり行動の増強は、A子が母親と面と向かうことによつてアンビバレンスが強まる、その結果の表れなのであろう。A子には母親に甘えることに対して強い罪悪感が生じているのだ。A子がさかんに母親と一緒に外出したがるようにしたのは、少しでもそうしたアンビバレンスを弱めるための行動ではないかと推測されたのである。

以上のことを母親にわかりやすく説明した。

このような面接を積み重ねていくにつれ、

母親は次第にA子の行動の背景に、いかに母親に対する思いが働いているかに気づきやすくなっていった。こうして少しずつではあるが、母親はA子の不可解な行動をみずからの関係の中で捉えることができるようになっていったのである。

第八回

入室するなり、母親はメモ帳をバッグから取り出し、筆者がまだ面接の準備も終わっていないにもかかわらず、すぐにこの一週間にあったことを報告し始めた。相手の動きに同調するのが多少難しいところのある人ではあったが、この時の母親は、まるでうれいことがあつた時、居ても立ってもいられず息を弾ませて母親に報告する子どもの姿を彷彿とさせるものであつた。

そこで筆者は、家庭でのA子の様子を聞きながら、母親と一緒にA子の気持ちを考えていくことにした。そこで初めて浮かび上がったのが、新聞読みと時計凝視という奇異な行動の背景にあるA子の気持ちであった。新聞を見ながら顔を新聞に当てて、時計をじっと見つめている。その際、首を激しく横に振るといふのである。このような行動をさかんに繰り返す。この奇異な行動は、両親ともにいる際に目立つ。父親はそれをとて

も嫌がり、止めさせたくて仕方ないのだが、母親はA子の行動の背後に「自分のほうをもっと見てほしい」という気持ちを感じとっている。でも母親はどのように対処したらいいのか、止めさせたほうがよいのか、筆者に尋ねるのであった。

そこで筆者は、具体的にどう対応したらよいかは難しいが、今はA子の気持ちがあんなところにあるのか、一緒に考えていきましようかと伝えた。なぜなら、A子は母親との関係を求める気持ちがとても強くなっている大事な時である。母親への甘えが強まると、アンビバレンスが刺激されることによって、奇異な行動が一次的に激しくなることはよくあることである。そのような表に現れた現象にとられることなく、この変化を肯定的に捉えていくように、と助言した。今はA子の気持ちを感じとってさり気なく対応するように心がけてほしいとも付け加えた。母親には何かしなければならぬとの思いが強まっていることが考えられたので、そのことを考慮して、A子の動きに応じる程度の気持ちで接すればよいと強調しておいた。

第九一〇回

この日、面接室に入る前に、女性セラピストがA子に遊戯療法室に行こうと誘った。A

子はすぐに行こうとしたが、母親が筆者に何かを尋ねようとした。そのことでA子はどうしたらよいか、少し困惑の反応を示していた。母親はそれに気づかないだけでなく、戸惑って立ち止まっていたA子に対して、へどうしたの？ 行かないの？と促していた。

このような場面に、日頃から母親がA子の細かなところの動きを気づかないままに、A子にいろいろと行動を促しているのではないかと、想像された。このことを取り上げてしばらく考えてもらおうとしたが、母親はこの一週間に、中学から高校の頃の昔に住んでいた町に久しぶりに出かけたことを筆者に一時も早く報告したような様子であった。

この日同席していた父親が最近の母親の様子を、へこの頃、おまえはテンションが高いよねと指摘する。母親自身はその変化に気づいていない。筆者からみても、母親は明らかに元気になって、筆者に少しでも早く報告したそうにしていた。A子よりも母親のほうが子どもに返っているのではないかと思われるほどだった。母親はA子の行動面の変化を肯定的に受け止めるようになってきたのである。

第一一回

母親が何かをしていると、必ずA子が近寄

ってきて、何をしているか、何をしようとしているのか、どこに行くのか、などと尋ねてくるという。母親はA子が何かをしてほしいという気持ちの表れではないかと思っている。しかし、いざ何か世話をしようとする、へもういいですとそれ以上のかかわりを避けている。ここにもA子のアンビバレンスがいまだに強く働いていることがうかがわれた。

母親は頭ではA子のアンビバレンスに気づいて理解しているが、A子に何かをさせなければという誘惑にかられるという。このことが、母親に近づきたくても、容易に近づけないA子のアンビバレンスをいまだに強めているひとつの要因ではないか。A子に直接何も言わず、そのままでもいいんだよ、と対応することができるようになればいいですね、とさり気なく母親に助言した。

第二一回

母親とスパに出かけて入浴したり、週に一、二回一緒に外食したりすることが定例化してきた。この日、母親自身の日常生活を詳しく聞いたところ、A子の世話がこれほど大変なものにもかかわらず、なぜか六年前から近所の学校で学童保育の世話係を買って出て、週に数回出かけているということがわかつ

た。四六時中A子と面と向かう生活は母親自身にとつても大変で、気分転換としての活動ではないかと想像された。

第三回

A子の幼児期の思い出を語ってもらった。右向けと言われたらずつと右を向いているような子どもで、とにかく素直な子だった。反抗期もなかった。母親自身も素直で反抗期はなかったという。子どもの過去を振り返りながら、自分の子ども時代と重ねて語る姿が印象に残った。

第四回

A子の昼夜逆転が改善した。朝起きるようになった。その契機となったのは、前回のセッション終了後、いつものように昼食をとるために診療所近くのレストランで母子一緒に食事をした時の出来事であったという。

二週間ぶりにそのレストランに入って食事をした。いつものようにA子はゆっくりと二時間ほどかけてほぼ全量食べていた。A子はまだスープを残していたが、母親は先にレジに行つて会計を済ませるからと言つて席を立つとうとすると、A子は母親に、自分の傍にいてスープを飲むのを見てほしいと要求したというのである。母親は夕方祖母の世話が

あるので会計を済ませるから、とA子に伝え、レジに向かった。すると、すぐに走つて母親を追いかけ、母親の手を引っ張つてスープを飲み終わるまで傍にいて、と執拗に要求した。母親は次の予定があつたので、先に外に出ていこうとした。A子は再び母親のもとに行つて一緒にいるように要求したが、母親は堪え切れずに出ていってしまった。仕方なくA子もついてきたが、電車に乗っている間、ずつと「戻ろうよ、スープ飲むまで」と言い続けていた。母親はA子の繰言を無視していたが、電車から降りるとそのことは言わなくなつたという。このエピソードはA子が母親に対して明確に自分の気持ちを押し出すことができるようになったことをうかがわせるものであつた。

そしてその翌日、驚くべき変化が起つた。昨日昼までずつと寝ていたA子が朝九時頃起きていた。そしておやつを食べて、昼には食事をするまでになつた。時間はかかるが、二回分の量を摂つていた。その後もパンやおやつを食べていた。実はその数日前にA子は夕食を夜中一二時頃おもむろに数時間かけて食べていた。しかし、夜中にA子が動き回るため、祖母が眠れないと訴えだした。A子はそのことを注意されてから、夜中の食事をしなくなつた。その代わりに、朝起きて食

事をするようになったという。

さらに、さかんに母親に外出しようと要求するようになった。これまではスパや外食が目的であつたが、図書館、水族館、さらにはさまざまなイベントがあると行きたがるようになった。俄然活動的になつてきた。しかし、行つた後には決まって「面白くなかつた」と感想をもらし、時に「死にたい!」と、再び包丁を胸に突き刺しながら訴えることもあつた。母親はせっかく連れていつたのに、そんなことを言われて正直うんざりしたというが、するとA子は「入院したい!」と訴える。母親はその言葉を真に受けて、筆者に以前入院した病院に連れていこうと思うとまで言い始めるのだった。

A子の自己主張が明瞭になつてきたが、そのことの心理的意味について、母親はいまだびんとこない様子である。「入院したい!」はA子の母親に対する挑発的な言動であつて、入院したいと本心から言っているのではないのだが、母親は字義的対応をしてしまふ。まだまだ母子間の負の循環は生まれやすい。母親にこのことをわかりやすく説明した。

第五回

前回の翌日の土曜日、A子がテーマパーク

に行きたいと言ったので、急ぎよ行くことにした。幼児向けのコーヒークップなどに母子一緒に乗って楽しんだ。ずっとここにいたいというほどA子は楽しんでた。このことを報告する時の母親の声は弾み、いかにもうれしそうで、母親自身も子どものようであった。

この一週間、以前より少し早くなったA子の夕食に母親はずっと付き合うように心がけた。その後、母親も途中で眠くなったので、先に寝るよと言って席を外しても、A子はとくに抵抗せずに受け入れた。こうして生活リズムはほぼ通常に戻っていった。ただ、いまだ両親と一緒に食事をするのは困難であった。それでもA子の食事のとり方は独特で、ある意味をもっているのではないかと感じられた。それは以下の通りであった。

通常食卓に両親と祖母、そしてA子四人が座るのであるが、母親とA子、真向かいに祖母、その隣が父親の席であった。もちろん、父親と祖母は席についていないが、A子が食事をする時、母親は左隣に座って付き合っている。茶碗と汁、そしておかずが置いてあるが、ご飯を一回口に入れると、父親の席にその茶碗を置き、ついで汁を吸っては茶碗を父親の席に置く。そしておかずを口に入れ、父親の席へ。今度は父親のところに置いたご飯

茶碗を取って自分の口に入れて自分の席に、ついで汁、おかず……と。このような順番で食事をしていくのであるが、このような食べ方を見ていると、まるで父親と一緒に食事をしていて、A子は父親と自分のひとり二役を演じているようにさえ見える。

もともとA子は父親に対して肯定的な気持ちをもちていた。自分の行動について父親が怒ったり注意したりしても、反撥せず自分では納得しているところがある、と母親は言うのである。つまり、すでにこの時点でA子と両親とのあいだで会食が行われているともいえる関係が芽生えていたのであろう。ではなぜ直接両親と一緒に食事をするには抵抗があるのか。直接面と向かって相対することにはいまだ強い緊張があるからなのであろう。それほどアンビバレンスは強いということがうかがわれたのである。

このような変化の一つの要因として筆者が母親に行った助言がある。A子の気持ちを考えて食事の時には付き合っしてほしいけれど、そばでじっと見ていると互いに気になって仕方ないので、その時母親は手仕事か何かをやっているくらいのほうがよいと思う、どうしても眠くなったら正直にそのことを伝えて先に寝てもよい、あまり気負ってやらないように、と前回母親に助言しておいた。それを母

親は素直に実行していたのである。

この日、最後にA子に会って、何か不安なことや希望はないかと尋ねると、はつきり「へい」と言っていた。数回前に入院したいと頑なに主張していた姿は消えていたのである。

第一六一一七回

夜中にA子が食事を始めると、終わるまでに数時間かかるが、母親は最後まで付き合わずに先に寝るようにしているという。そんなことが自然にできるようになってきた。A子のこだわり行動にも大きな変化が起こっていた。これまで日常使っていたスリッパなどを汚れたから買い替えようと思っても、頑なに拒んでいた。そんなA子であったが、最近はそのいった提案にすぐに領いて、母親と一緒に買い物に出かけるようになった。メガネも買い替えに行った。スリッパは父親と買いに出かけた。

A子のこだわり行動が減っていった大きな要因に、母親がA子の変化を素直に肯定的に受け止めることができ、A子との関係の変化を実感でき、心底うれしい気持ちが強まってきたことがあげられよう。そのことが面接でもひしひしと感じとれるようになってきた。

この頃の母親はずいぶんとA子に忍耐強く付き合えるようになっていたが、時折迷いを口にしていた。筆者は、母親が学童保育で昼間出かけることについて、それがA子にとつてどのように映っているかを一緒に考えながら、そろそろA子としっかり向き合うように、と母親に覚悟を迫った。母親は黙って聞いていた。

第一八回

前回の面接の影響からか、母親も開き直つてとことん付き合う気持ちになれたようだ。すると、母親は喉が痛い、熱感を訴えるようになった。発熱はなかったが、子どものこと、夫のことなどいろいろと考えるようになって、頭の中が忙しくて眠れなくなったと不眠を訴え始め、私のほうこそ薬がほしいと、筆者に睡眠薬を要求した。さらに、下痢がこの一ヶ月続いているという。排便はこれまで規則正しかったのに、ともいう。

これまで保ってきた心身のバランスが揺さぶられた結果、心身症反応が起こったのである。そのせいであろうか、母親の表情はより自然になり、近づきやすい印象を受けるまでに変化した。母親の心身症反応はその後まもなく消退した。

第一九回（初診からおよそ五ヶ月経過）

母親がこれまでA子を育ててきたことを内省するようになった。

娘をこれまでいろんなことができるようにと頑張らせてきたけど、よくなかったんでしようかね。たとえば、漢字を覚えたら世界が広がるのではないかと思つて、一所懸命に漢字を教えてきた……。

おわりに

本稿は広汎性発達障害を有する成人女性に對して行つた筆者の關係（発達）支援について、とくにその實際について詳細に論じたものである。本事例がなぜ家族との關係の中でひきこもり状態を呈さざるを得なかつたのか、そこに生じた母子關係のありようを描写し、その意味とそれに対する介入について経過に沿つて述べた。

治療経過の中でとりわけ注目する必要があると思ふのは、母親の娘に對する一貫した愛情と、娘とのかかわりに對する素直な内省的態度である。娘との關係が深まるにつれ、まるで自分が子どもになつたように素直に喜びを表現している。母子關係の悪循環が好循環へと変化したことが母子双方に劇的とも思ふ変化をもたらしている。このような変化が起こつて初めて、母親も過去の養育を素直に

振り返ることができたのである。

広汎性発達障害にみられる關係欲求（甘え）をめぐるアンビバレンスとそれに基づく關係障害が、その後の多様な精神病理の基盤を形成していることを、筆者はこれまで再三にわたつて指摘してきた¹⁾。このひきこもり事例でも、そのことが母子關係に負の循環をもたらしていることが浮かび上がり、アンビバレンスを緩和するための工夫と介入を積み重ねていくことによつて、ひきこもりからの回復もたらされることがわかる。

なお、最近筆者が直接、間接に関与したいくつかのひきこもり事例においても、同様の視点から接近することで回復が見込まれる手ごたえを得ている。

〔文獻〕

- (1) 小林隆児「よくわかる自閉症―關係発達―からのアプローチ」法研、二〇〇八年
- (2) 斎藤環「社会的ひきこもり―終わらない思春期」PHP新書、一九九八年
- (3) 斎藤環編「こころの科学」一二三三号（特別企画）ひきこもり、一一一〇八頁、二〇〇五年
- (4) 杉山登志郎「ひきこもりと高機能広汎性発達障害」『こころの科学』一二三三号、三六一四三頁、二〇〇五年